

でくるものは全て、初めてみるものように新鮮に感じられた。

あちこちまわり道をしながらたどり着いたのは、通い始めて二年目になる県庁である。私の勤務する福利課がある西庁舎は、十二階建てとあって、見上げるとかなりの威圧感がある。福利課にいらつしやる方が、「お役所に来るのはどうも抵抗があつて。」とおつしやるのがよく分かる。私自身もつい最近までそうであつた。しかし、今は少し違う。通い慣れたせいもあるが、実はこんな建物の裏にもちよつと素敵な場所があることを発見したからである。

釣りをする人、子どもと散歩する人、ベンチで休む人、水鳥、新緑の並木、菜の花……。県庁の南側を流れる阿武隈川に沿つた遊歩道の風景である。桜の木は今でこそ緑の葉に衣替えしているが、つい数週間前までは見事な花を咲かせ、通る人の目を楽ませていた。この場所を発見した私と友人は、満開の桜を見ながら昼食をとつたのだが、私達の他にも桜の下で弁当を広げるグループが沢山あつた。毎日県庁に通つていながら、今までこういう場所があることを知らずに過ごしていたことを思うと、他にも見過ごしてきたことが沢山あるように思われた。

何もかもが初めての経験で緊張の

連続。目の前のことだけで精一杯。見通しなど何も無い。周囲の人の暖かい心遣いに支えられてばかりの一年間であつた。心にもう少し余裕があればもつと多くのことを心に留めることができただろう。

しかし今、二年目に入ったからといって急に余裕が持てるわけがない。どうしていったらよいか。ふと思ひ出したのは、学生の時受けた「短期療法」の講義である。登校拒否等の問題解決の事例中心であつたのだが、その解決法の基本に「小さな変化を与えよ」というのがある。「大きな変化は長続きしないが、小さな変化は水に小さな石を投げてできる波紋のよう

涼やかな風

吉田 信也

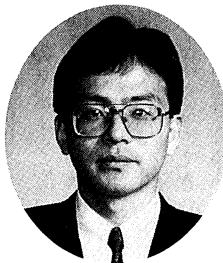
那倉小学校は阿武隈高地の南端、標高約六〇〇Mの山間部に位置している。緑深い山々と清き流れの那倉川、そして吹きぬける涼やかな風。

埴町内から約四〇〇M上ること、春の野の花や木々の若芽のやさしい色あい、秋の燃えるような紅葉の鮮やかさ、清流に躍動するヤマメの姿など、どれをとつてみても一級

に大きく広がっていく」という考えなのだが、これを使つての第一段が今回のサイクリングであつた。

直接は仕事の余裕と関係ないかもしれないが、ペダルをこぐことで直接風を肌で感じたり、無理のない汗をかいたり、さわやかな気分になれた。きつと明日、どんなに忙しい一日になつても、職場で笑顔でいられるような気がする。ちよつとした変化をおこして、毎日の生活も変化させていけたら。心にゆとりのある毎日になつたらいい。そんなことを思いつつ、変化をおこすきっかけになつた遊歩道を後にした。

(県教育庁福利課主事)



品の自然にあふれた土地と言える。

このようすばらしい自然の中で、全校生四十一名と職員八名との生活は、それまで目の前の細かなことにはばかりあくせくしていた自分、あるいは教員になつて十三年、少々中だるみがあつたのかもしれない、そんな自分にとつて、何か目を覚まさせてくれるものがあつた。穏やか

でゆつたりとした時の流れは、私に周囲のことに目を向ける余裕を与えてくれたのである。

全てが理想的な子どもたちというわけではない。生活経験の狭さや自分を表現することの未熟さは、その代表であろうと思われる。でも、両親や地域の人たちによって育まれた純真さや素直さは、それらを消して余りあるほどのすばらしさである。

子どもたちの透き通つた目の輝きは、三十五年の間に私の心の中に積もつた塵や埃を吹き飛ばしてくれるかのように思われた。那倉の子どもたちが、この地特有の涼やかな風を吹かせているのかもしれない。

学校行事の中に、奉仕活動がある。これは、学校周辺のゴミを全校生で拾うものであるが、毎回予想以上のゴミや空き缶が集められる。

子どもたちの自慢は、やはり那倉の自然の美しさである。奉仕活動では、「先生、どうしてこんなにゴミがあるの。」「いったい誰がゴミを捨てるの。」と、不平を言いながらも、熱心にゴミ拾いをするのである。

自分たちの土地に対する愛着が、いつしか登校する際にもゴミ拾いをすることに発展していったのである。この地に赴任してきた頃、何度か耳にした言葉である。

「学校に僻地はあつても、教育に僻